

佳作

戦争への考え

岡山県倉敷市立北中学校二年 浅井聡介

八月十五日。今年も終戦記念日がやって来た。テレビや新聞のニュースで当時の様々な状況を目にして、たった七十四年前の日本でこんなにも残酷で悲しい事が起こっていたのかと衝撃を受けた。

その中でも特に衝撃を受けたのは特攻隊に関する事だった。特攻隊とは特別攻撃隊の略だ。そして、特攻隊に集められた人の多くは自分とほとんど変わらぬ命を顧みずに戦っていたけれど、特攻隊というのは自分の身を武器代わりにして敵軍に突撃するというものだった。しかも驚くことに国を守るために自分の命を犠牲にして、自分から志願して入隊したということ。

そして、そんな過酷な状況の中でも両親や家族への感謝の気持ちを残した手紙などがたくさん残っていた。

一枚の写真。真っ白な海軍の制服に身を包んで、精一杯の笑顔で敬礼をするあどけない十代の写真と、棺の中で年老いた曾祖父の顔を見て涙がとまらなかつた。

時代が違うとはいえ、自分と同じぐらいの年齢で、家族ともう二度と会えないかもしれないと思いつつ戦場に行った若者達の心は、どのようなものだったのだろうか。平和で何不自由ない世の中に生まれ育った自分には考えられないような心情だと思う。

世界ではまだ戦争が続いている。しかし、戦争は何があってもしてはならないと思う。僕達に出来ること。それは、戦争を体験した人の思いや言葉を忘れることなく、次の世代に引き継いでいくことである。そして、平和な時代に生まれたことに感謝し、毎日を一生懸命に生きようと思った。

いる。

今の自分はどうかだろう。毎日、十分な食事ときれいに洗たくされた服、何不自由ない生活を与えられているのに、親や家族への感謝の気持ちを忘れ、反抗したり文句を言ったり、やるべき事をやらずに楽な方へ逃げてしまっている。

何年か前に亡くなった僕の曾祖父も特攻隊ではないけれど、僕とほとんど変わらない十代の時に海軍として、フィリピン沖の方に出兵していたと聞いた。曾祖父の右足はひざから下がなかった。それは、海軍の船に乗っている時、空から落ちてきた敵機からの爆撃が足に直撃したからだ。想像を絶する光景だ。なんとか命だけは助かって帰って来た曾祖父は、ぎ足をはめ農業や林業で五人の子供を立派に育てあげた。

曾祖父はいつも笑っていた。そして自分で作れる物は全て手作りして、口癖は「もったいない」だった。命をかけて戦争に行き、片足をなくし帰ってからは、モノのない時代を不都合な体で生き抜いた。曾祖父の笑顔はどん底の悲しみや苦しみからはいあがってきたからこそあふれる、真の強さからくる笑顔だったのだと思う。曾祖父の葬儀でかざられていた